

資料渉猟余話

その126

また南海（應木）
・ハル工ともに戒名
には「院殿」が入っ
ており、相当の高位
の生まれかと思わせ
る。水野英男さんも

「郡上八幡の土族の
生まれであると聞
くと書いているが、
郡上八幡の「青山家」
家臣を含め、和田・
西澤とも、『郡上八幡
誌』には今のところ、
それらしき人物は見

つからない。彼らが
葬られている寺もわ
からないので、戒名
の出所も確かめよう
がない。

大正10年の記事中
で、南海の手元に残
された4歳の長男は
秀雄といい、昭和14
年に尾林の水野家に
住んでいた老年の父
南海をともなつて渡
満した。これは尾林
の水野啓介氏、天龍

村の係累とも同様の
証言を得た。
さらに先の鎌倉氏
の調査では、南海は
昭和14年1月25日
に、秀雄の妻と6歳
と2歳の子ともは昭
和20年11月15日同日
亡くなっていること
がわかつている。南
海は渡満後程なく、
息子秀雄の妻子も終
戦後の混乱の中で亡
くなったことにな

南海さんって誰？ 下

る。軍隊（軍属）に
いたであろう秀雄は
一人だけで帰国、そ
の後再婚、平成4年
1月25日78歳で没し
た。子もいたがす
に、あちこちに残されて
いるのだ。
同時期、松本市に
善光寺仁王門の阿吽
像を高村光雲と合作
したことで知られる
太田南海（1888
—1959）という
彫刻家が活躍してお
り、南海さんの作品
は松本あたりに持つ
ていくと高値がつい
たというまことしや
かな話もある。文展
作家と見紛う遜色の
ない作品を製作して
いたのだから、「南海
さん」改めて見直さ
るべきかもしれない。

うに思うが、いかがであろうか。



初期の銘は釘で引っ掻いたサインに
角印「應木之作」が多いようだ